

近代における都市的生活様式導入装置としてのホテル
-----昭和初期の甲子園ホテルを例に

○松本佳子 角野幸博（武庫川女大）

日本のホテルの歴史は、1868年の築地ホテル館に始まっている。外国人の宿泊施設として建設されたホテルは、洋式の設備を備え洋食を出したため、外国からの賓客をもてなす場になるなど国の顔としての性格が強かった。一般の日本人には縁遠いものだったホテルが日本の都市社会に浸透しはじめるのは、昭和初期である。ここでは昭和5年に開業した甲子園ホテルを例にとり、ホテルがどのように使われたか、またそれが家庭生活とどのような関係にあったかを考察する。

甲子園ホテルは、娯楽・観光施設が充実してきた阪神間に、リゾートホテルとして建設された。しかし、当時の新聞には皇室や政府の要人の宿泊したり会合を開いたりしていた記事があり、旅行客の宿泊施設としてだけでなく、国の重要な施設という側面ももっていた。また聞き取り調査などから、甲子園ホテルが近隣の人々に宿泊以外で利用されていたこともわかった。大正から昭和初期の阪神間には、郊外生活が定着してきていた。そこに住む人たちにとって甲子園ホテルは、結婚式や披露宴会場をはじめ各種会合を行う場所となり、家族で食事やクリスマスパーティーに出かけるところとなっていた。またマナーの講習会なども開かれている。それまで家庭で行われていた行事や催しがホテルという外の機関で行われるようになったために、外出の機会が増えるなど生活習慣に変化が起き、それと並行して、ホテルで経験した洋式のライフスタイルが家庭の中に影響を与えている。

ホテルは、家庭機能を外部化させたり家庭生活を洋風化させるなど、都市的な生活様式を導入する装置となっていたのである。